



魔拳のデイドリーマー 4

α L P H α L I G H T

西 和尚
NISHI OSYOU



アルファライト文庫



主な登場人物

ナナ

トロン村で出会った奴隷^{どらい}の少女。
機転が利き、腕っぶりも強い。

リュート・ファンゴール

三人組「ブルー・ジャスティス」のリーダー。
「正義」のためなら手段を選ばない。

ブルース・クーザント

ミナトの兄で、
二メートルを超える長身。
傭兵団「バシレイア」の
頭目。

ウィリアム・キット

ミナトの兄で、通称ウィル。
魔物の生態を研究する
生物学者。

ダンテ・アンキラス

ミナトの兄、ドワーフ族の
凄腕^{いひ}医者。厳^{きび}つい風貌に
反し、繊細な一面もある。

ザリー・トランター

一見チャラ男な冒険者。
情報屋として
幅広い人脈を持つ。

ミナト・キャドリーユ

本編の主人公。
異世界に転生して強力な
戦闘術を身につけた。

エルク・カークス

努力家タイプの
美少女冒険者。
ミナトの相棒^{あいはら}となり
共に行動している。

ノエル・コ・マルラス

ミナトの姉でマルラス
商会のトップ。
狐耳と尻尾を持った美女。

第一話 ブルージャステイス

『花の町』 ミネットからウオルカに帰還して、もうすぐ一ヶ月。

僕ことミナトや相棒・エルクあいにぼろの生活はだいぶ変わっていた。

まず、毎朝の日課である朝練あされんに、新たな参加者が一人増えたこと。

言わずもがな、ミネットへ向かう商隊の護衛任務で仲良くなった『ネガエルフ』のシェリーさんである。

僕の実力を知ったシェリーさんは、毎朝訓練に顔を出すようになり、その際、当然のように手合わせを申し込んでくる。嬉々ききとして。

何せ彼女、戦闘狂バトルマニアなので。

まあ僕としても、彼女との手合わせはいい訓練になるので、度が過ぎないように相手をしている。さすがに真剣は使わないでもらってるけども。

そしてシェリーさんには、交換条件として、エルクの訓練と一緒にしてもらっている。実力的に僕とエルクの間がに位置している彼女は、エルクと同じ刃物を使って戦うので、

エルクの訓練にちょうどいいのだ。

もつとも、シェリーさんは他人に教えるのが苦手らしいから、主に組み手の相手だった
り、細かい部分の指摘しできがメイン。

ネガエルフの隠れ里にいた当時から突出した才能を持っていた彼女は、今でもそのセン
スに頼っていた。戦いのときにどう動けばいいか、それを感覚で理解してる。

戦闘をあくまで自然にこなす彼女は……それを言葉で説明するのが苦手、つてわけだ。

一方、これまで以上に訓練の効率が上がったエルクは、さらに勢いよく成長しつつある。
シェリーさんも舌を巻いていた。

けどさすがに、冒険者ランクBの壁は厚いようだ。

僕に師事し始めてから、トントン拍子でランクCまで来たエルクだけど、さすがにリト
ルピースト級以上の魔物と戦うには、いいよ力が足りなくなってきた。

そんなわけだから……彼女にとってももうすぐ行われる『訓練合宿』は、いい刺激にな
るんじゃないかと思う。

それとエルクだけでなく、フクロウのアルバにも変化が。

いや、変化というか、転機というか……何て言うべきか……。

ともかく、二週間前のことだ。

その時僕は、日課で魔法書物『ネクロノミコン』を読んでいた。ところが二千ページを

越えたあたりから、奇妙な違和感を覚えるようになった。

読んでると頭の中に、もやもやしたものが湧き上がってくるというか……文字列に目を
走らせているだけで、直接知識が流れ込んでくるような感じ。

よくわからない、今までで初めての感覚。それが何なのか気になった僕がエルクやシェ
リーさんに聞いてみると、二人はその正体を知っていた。

『グリモア』。別名『グリモワール』とも呼ばれ、特別な魔法書物に用いられる書式だ。

グリモアが記載されているだけで、その書物は数ある魔法書物の中でも、ダントツで激
レアな部類に入る。

なんと『読むだけで魔法が使えるようになる』のだ。読んでいる者の脳内に、データを
コピーするかのごとく、自動で魔法を刷り込むらしい。

何度でも使えるものと、数回使うと効果が失われてしまうものの二種類があるそうだ。

古代文明の魔法使いによって作られたと言われるそれらは、ごくまれに遺跡などで見つ
かる程度で、製造方法は現代ではもう失われていた。

発見されると有力な貴族や王がこぞって手に入れようとするため、物によってほとんど
もない高値で取引されるらしい。

冒険者仲間で情報屋でもあるザリー——分野にもよるがエルクやシェリーさん以上に博
識——の話だと、最近開催されたオークションで、そこそこのレベルのグリモアが金貨数

枚という大金で落札されたそうだ。

使用回数が無限のグリモアなら、記録されているのが初心者用の魔法だとしても、考古学的な価値があるので、金貨数十枚から数百枚は下らないらしい。

ただ、もともと魔法の才能がない、もしくは乏しい人が読んでも意味はない。

読んだからといって急に魔法が使えるようにはならないし、相性^{あいしう}つてもものがある。例えば、水の魔法をまったく使えない人が水魔法系のグリモアを読んでもムダだ。

なので、僕が読んでも違和感があるだけだったわけ。

エルクとシェリーさんは魔法の才能があるけど、相性が悪かったらしく、何も習得できなかった。まあ、これから先はわからないけど。

……ただ、うちには魔法の才能が高いやつがもう一人いる。

訂正……一羽いる。

僕の肩口に止まって一緒にネクロノミコンを覗き込んでいた、我らが超^{スーパ}クロウ君は、どうやら人語を理解できるだけじゃなく、文字も読めるらしい。

僕ら三人がグリモアについてあーだこーだ言ってるそばで、じつと文字列を見ていたアルバ。

翌日朝の訓練では、すでに魔法のレパトリーが増えていた。

言わずもがな、ネクロノミコンにグリモアで記されていたものだ。

心身共に未成熟なせいとか、前日に読んだページのうち、アルバが習得できた魔法は半分以上だったけども、それでも十分すごい。

これからもっと成長すれば、使える魔法が増えていって……ゆくゆくはこいつ、この本の魔法全部使えるようになるかも。

そして、さっそく使い始めた魔法の中に……『重力操作』というのがあった。

かなり難^{なん}易^い度の高い魔法なんだけど、アルバにはそんなことは関係なかったらしい。

ごく限られた範囲ながら、数倍の重力を発生させる魔法を、見事に使いこなしてみせた。

その重力魔法には、僕も訓練の時にお世話になっている。内容は簡単、アルバに重力魔法をかけてもらいながら筋トレやランニングをするだけ。

例えば重力が二倍になれば、体への負荷^{ふか}は二倍どころじゃない。時間や回数を増やすまでもなく、いいトレーニングができる。

アルバも魔法の練習になるし、一石二鳥だな。

そんな感じで、訓練合宿までの一ヶ月という時間を潰^{つぶ}している僕だけど、ほかにはエルクやシェリーさん、あと時々ザリーとも一緒になって依頼をこなしたりしてた。

最近^{しんきん}は洋館にいたことを思い出して、オリジナル魔法の開発なんかもちょこちょこ行っている。監督役の母さんがいないから、あくまで慎重に。

ここ三週間くらいで、三種類ほど使える魔法を増やしつつ……僕らは期待に胸を膨^{ふく}らま

せていた。

ギルド主催のイベント——職員や先輩冒険者の指導の下、新米冒険者達が己を高める『合同訓練合宿』の開始が、近づいていたのだ。

☆☆☆

いよいよ集合日の前日。

朝練中にやって来たザリーを加え、僕ら四人と一羽は、その準備をすることになった。

「……って、何で市場に来てんの？ 何の買い物？」

「そりゃもちろん、訓練合宿に持っていくものだよ」

僕の質問に答えるザリー。

「ギルドには、『必要なものはこつちで用意するから、何も持ってこなくていい』って言われたんだけど……？」

「持っていなくてもいいけど、持っていってもいいんだよ。後でいろいろと役に立つことも多いから」

「おやつとか、薬とかってこと？ いいの、そんな適当で」

持ち込みNGみたいなルールないだろうか？ 例えば、関係のないものを持っていく

と没収されるみたいな、修学旅行や部活の合宿みたいな決まり事。

「基本的にないよ。あくまで今回の『訓練』は、冒険者としての総合的な実力を鍛えるものだからね。その中には、事前準備も基礎力として含まれるわけ。何をどれだけ、どうやって持ってきてても文句は言われない。もつとも……訓練中に強奪されることもあるんだけど」

「強奪……って、参加者同士で奪い合いでもさせるの!？」

ぎょつとしているエルク。その後ろで面白そうにしているシェリーさん。

なんでこの二人はいつも反応が対照的なんだか……いや、まあ、どっちが普通じゃないのかは、この上なくはつきりしてるんだけども。

「そういったケースもあるけど……」

あるんかい。

「いや、担当の教官——もちろんギルドの冒険者なわけだけど、中には盗賊の襲撃を想定するとか何とか言って、私物を寝てる間に奪ったりする人もいるから。もちろん、後で返してもらえるし、気づいて防げればそれでもOKだけど」

「なんちゅう物騒な……」

とんでもない鬼教官が出るんだな、この合宿。

まあ、先のことは考えていてもしかたないので、さっさと準備を進めることに。

ザリーによれば、毎年ばらつきはあれどそれなりに過酷らしいので、どんな状況でも対

応できるような装備・アイテムを揃えることに。

まずは食料。

乾パン……というより、ライトミールブロックみたいなやつだ。時間がない時に、手軽に食べられそうなやつ。

それと、水。

地球では、冷蔵庫などの保存技術が未発達だった大航海時代、水の代わりに腐りにくい酒を船旅に持って行っていたらしい。

けどこの世界には、ちよっとお値段は張るけども、中の水が腐るのを防ぐ（防腐魔法とでも言うべきだろうか？）処置が施された特別な水筒が売られている。

もっと高級な水筒になると、収納魔法の応用で容量が何リットル、何十リットルもあるタイプもあったりするんだこれが。お金に余裕のある冒険者には、これを買う者も多い。

そこに、水に限らずジュースや酒といった好みの飲み物を入れて持っていくのが割と定番。

もつとも……その水筒に関しては、ノエル姉さんと知り合ったすぐ後に商会から買ったので、もう持ってる。

ちよっと迷宮の大蛇『ナーガ』を倒した報奨金が入ったところで、せっかくだしいい奴をもってことで、金貨二枚ほどする数十リットルの水筒を買った。

『ブラックパス』のおかげで安くなるし、二人分買おうとしたら「無駄使いすんな」ってエルクに止められたので、二人で一つを使ってるけどね。

ちなみにシェリーさんも、さすがAランク冒険者というべきかそれなりに稼いでおり、立派な水筒を持っている。僕らが使ってるのよりは小さめで……中身は当然のごとお酒だったけど。

というわけで、僕らが買うのはさっき言った携帯食料に、干し肉とかの日持ちする食料、それと水筒に入れる飲み物。

なじみの店のおっちゃんに声をかけて、いつものお茶を水筒に入るだけ入れてもらい、ティーバッグも購入。前世の麦茶みたいな味で好きなんだよね。

それに加えて、武器や消耗品の補充や整備も済ませる。エルクの投げナイフとか、照明のカンテラ用の固形油とか。

僕も姉さんの商会に寄って、注文していた手裏剣を買い足した。こいつだけは特注品で、ここに来ないと買えないからね。

それともう一つ、アルバ用の折りたたみ式止まり木を新調する。

アルバがさらに成長して、前に使ってた奴が小さくなったからだ。生まれた当初はハトより小さかったこいつも、今ではタカくらいの大きさになっている。

もつとも、実力はそれ以上の勢いで成長してるけども。

そんな感じで買い物を進めていた時だった。

場所は、酒屋。シェリーさん行きつけの店。

樽で酒を買おうとしているシェリーさんに呆れていると、何やら店の外から、もめているような怒声が聞こえてきた。

見ると、人だかりも出来ている。何だろ、ケンカかな？

樽一つ一つの酒をすべて試飲しているシェリーさんは、まだまだ時間がかかりそうだったので、エルクとアルバを連れて行ってみる。

人ごみの隙間から覗くと、気分が悪くなる光景が広がっていた……というか、繰り広げられていた。

ざっくり言ってしまうと、うずくまるみすばらしい子供を、小奇麗な服を着た大人がガス蹴っている光景。

しかもちょっと程度の低い、そして容赦ない罵詈雑言のおまけつきだ。

どうやらこの、歯を食いしばって必死に耐えている少年は、ウォルカ郊外のスラム（そんなのあったのかこの町）に住む孤児らしい。

エルクに聞くと、一応スラムの存在は知っていた。

貧しくてその日の食事も満足に得られないような人々が暮らす地区で、大通りからはか

なり離れてるそうだった。なるほど、なら僕が知らなくても無理ないか。

日雇いの仕事をしたり、犯罪に手を染めて生活してる人もいるらしい。治安が悪い、いわゆる無法地帯だ。

で、そこに住んでる人達は、スラムを出ると白い目で見られるだけだから、そこからほとんど出てこない。

その代わりってわけじゃないけど、スラムの中で、迷い込んできた人をカツアゲしたりするんだとか。

今日の前で蹴られている少年は、どうやら相手から、何かを盗もうとして失敗したらしい。聞き耳を立ててみると、その相手は商人で、商品を盗まれそうになったようだ。

どうやら姉さんのマルラス商会じゃなく、もつと小規模な個人経営の商人っぽい。損害に直結する窃盗未遂……しかも、犯人がスラムの孤児だったことも手伝ってるのか、

手加減ないな。何度も腹を蹴ってる。

すると、固く握り締められていた少年の手が、蹴られた拍子に開いてしまい……何やら小さくてキラキラした、赤い宝石のようなものが転がり出た。

すぐさま商人が屈み込んで、それを回収する。そして、安心したようにホッと一息ついた。なるほど、アレか、盗まれた品物って。

その間、少年を助けてあげようとする人は、周囲に一人もいなかった。

僕も含めて子供を気の毒に思わないわけじゃないけど、野次馬^{やじうま}全員の本音は、『あの子供は盗みを働いたんだから、自業自得』。それに尽きる。

もし、蹴られてる理由が理不尽なものなら違ったのかもしれないけど……今回の場合、商人にも言い分がある。

なので、下手に関わると面倒なことになりかねない。

死ぬことはないから、この世界の価値観どおり放っておく。おせっかいするにしても、警備兵を呼んで仲裁^{ちゅうさい}してもらう程度にしておけ、と、姉さんにも教わった。

最後に二言三言罵声^{ばせい}を浴びせると、商人はその場を去ろうとしたが、よせばいいのに、うずくまっている少年がその商人の足のすそをつかむ。

何だろう、よっぽどあの赤い宝石^{あまぎら}(?)が欲しいのかな？ まだ諦めようとしてないところを見ると。

商人は、今度はつかまれた足で蹴り上げる。あーあー、子供相手にまた容赦ない……。

しかしこのままじゃあの少年、ホント死にかねないな。

もうそろそろ助けないとマズい……と、思ったその時。

「ちょっと待て！ 何してるんだよ、あんた！」

そんな声と共に、野次馬の中から一人の若い男が飛び出してきた。

「!?」

周囲の野次馬が全員驚いている感じが伝わってきた。

僕やエルクとは逆サイドの人ごみをかき分けて出てきたのは、僕と同じぐらいの年齢の……『少年』と『青年』の中間、って見た目の男だった。

どちらかというと言顔^{どうがん}(多分僕ほどじゃないけど)。多分一般的にはイケメンとか言われる部類。

髪の毛は青色で、頭の後ろで縛^{しば}っている。

服や鎧は青と白を基調^{きてう}としていて、腰には一振りの剣。上品、かつ小綺麗な印象を受ける。そして、同じ配色のマントをまといてる。

僕よりは年上に見えるし、とりあえず『青年』とでも呼ぼうか——その青年は、騒ぎの中心にいる少年に駆け寄^{かけ}って抱き起こすと、心配そうな表情で呼びかける。

わずかに少年が反応^{かか}したことで、一応意識はあつて無事だということを確認すると、一瞬だけほっとした表情を見せ、続いて、その少年を蹴っていた商人をキッとにらみつけた。

「あんた一体何してるんだ！ こんな小さな、無抵抗の子供に殴^うる蹴^くるの乱暴なんて……大人として恥^はずかしいと思わないのか!?」

「なっ……何だてめえは!? いきなり横から出てきて……関係ねーだろ、あんたには!」

「関係なくても見過ごせないんだよ！ この子がかわいそうじゃないか！」

「……今日び、いるのね。あんな、誠実を通り越して珍しいもの……」

僕の隣でぼつりと、周囲に聞こえないようにつぶやくエルク。

あ、やっぱり珍しいんだ？ あの青年の、立派だけど酔狂なお節介さは。

周りが全員無視してるのに、構わず飛び出して子供を助けようとするという……道徳上は模範的でも、わざわざ自分から面倒事に首を突っ込む奇特な人。

「ええ、あんたという勝負ね」

「……え、僕、あんななの？ エルクから見ても」

「二ヶ月前を思い出してみなさいよ。自分を騙そうとした女を、今もこうしてそばに置いてるあんたの考え方も、十分奇特でしょうが」

ひどいな、おい。

いやまあ、自覚はあったけど……あの時はきつちり理由があったから、僕はエルクを信頼したんだけど。実際、エルクの決意や覚悟は確認できたし。

そんなことを僕らが話している間も、道の真ん中でぎゃあぎゃあ言い合う二人。

「そいつは俺の商店から商品を盗もうとしたんだよ！ 痛い目に遭わせるのは当然だろうが！」

「それは……確かに許される行為じゃないのはわかるよ。でも、こんな風に暴力を振るっ

ていいわけないだろう！ 相手は小さい子供なんだぞ！」

「言っても聞かないんだからしかたないだろうが！ 薄汚いガキのくせに、人様のものを盗みやがって……大人しく貧民街で物乞いでもすればいいんだよ！」

と、その時。

「へっ、なんだ、やることも薄汚けりや言うことも薄ぎたねーんだな、あんた」

「ホントよ！ 子供に対して何てこと言うのかしら！」

（増えた!?）

僕とエルクの心の声がハモった……と思う。

青い髪の彼が出てきた同じところから……また新たに二人現れた。

一人は黒に近い紺色のほざほざの髪をした、目つきの悪い男。

背丈は僕より頭一つ高いくらいで、背中に大剣を背負ってるところから考えると、戦士系なんだろうか。

そしてもう一人は、セミロングの灰色の髪に精悍な顔立ちの女性。

身長は僕と同じくらいで、気の強そうな目が特徴的だ。手にはワンド。魔法使い系かな？ どうやら、青髪の青年の仲間であるらしい。

そんな二人が加わり、さっきまでの延長みたいな口論が続く。「子供相手に」「盗んだんだから」「だからって大人が」……延々こんな感じ。

それを聞きつけたシェリーさん（酒を樽買いし終えた模様）とザリーも合流。僕が簡単に事情を説明していると、向こうの言い争いに動きがあった。

げんみつ

いや、厳密には……四人の傍で痛みをこらえてうずくまっていた少年に動きがあった。

取り戻した商品——赤い宝石みたいな——を握り締める商人に突進すると、何とま根源性のあることに、その商品をまた奪い取ろうとした。

一瞬だけその場を驚きが支配したけども、すぐにまた、商人の顔に怒りが浮かぶ。

思いきり振るわれた足によって、軽々と蹴飛ばされた少年は……あらまあ、こちらに向かつて飛んできた。

そして、偶然僕の近くにあった露店の棚に突っ込む。うげ、まずい。

運の悪いことに……その露店は金物屋だった。しかも棚の中には、ハサミやらキリやら、尖^{とが}つて危険なものがわんさか入っていた。

その中身が激突の衝撃でこぼれ出し……地面に転がった少年と、たまたま近くにいた僕らのところに降り注いでくる。

その様子を、驚愕^{きょうがく}の表情で見ていた青髪の青年は……次の瞬間はつとしたように、ワントンポ遅れて両手を広げ、こっちに走ってきた。



あれ？ これはあれか？ 少年を突き飛ばして自分が身代わりに——とか、そういうパターンか？ 自己犠牲的な。

かなりの勢いでこっちに走ってきてるし……もしかしてアレ、僕らも突き飛ばすつもりで走ってきてない？

まあ、僕達も危険ゾーンにいるから、そういった思考になるのかもしれないけど。

ただ、別にそんなことしなくても平気……っていうか、このままだとムダに彼が怪我するだけなので……。

「危なああああいつ!!」

「いや、あなたが危ない」

ダッ!! ↑ 危険地帯にいる僕と少年を助けるべく跳躍する青年。

ガスッ!! ↑ 突っ込んでぶつかったものの僕がその場から微動だにせず、青年、墜落しゅばばばばつ!! ↑ 落ちてくる刃物を僕が空中で全部キャッチ。

「おおお……」

——ぱちぱちぱち……。

周りから、驚きと感心の入り混じった声と拍手。ありがとーありがとー。

ザリーとシェリーさんが笑い、エルクは呆れている。

そして、突き飛ばすつもりだったのに跳ね返された青年と仲間の二人は、あぜんとしてこっちを見ていた。

☆☆☆

険悪だった雰囲気全部なあなにした、僕の千手観音キャッチの後。

これ以上騒ぎが大きくなっても誰も得しないから、つてことで、商人は赤い宝石を回収して、その場はお手打ちになった。

窃盗犯の少年は柵に激突して気絶したらしく、そのまま最後まで意識は戻らなかった。まあ、商人との話はついたので、問題はない。

なんとその『お手打ち』の交渉をしたのは、青髪の青年だった。

しかも、自分から進んで。ホントにどこまでもお人好しというか、ご苦労様というか。

そしてその間、後ろに控える仲間二人が、ずっと威圧的な視線を商人に飛ばしていた。最終的に商人も、許したってよりは面倒くさくなったって感じだったし。

その過程で、彼ら……おせっかい三人組の名前も聞くことができた。

「まずはお礼を言っておくよ。あの子と……」

「リユート！　こんな人に、お礼なんて言うこと……」

「いいんだよアニー。あの時助けてもらったんだから。あの子と僕を守ってくれて、ありがとう」

アニーというらしい女の子を右手で制し、青い髪の青年……リユートと名乗った彼は、ぺこりと僕に向かって一礼した。

一方の左手は、僕を突き飛ばそうとして失敗した時に出来たらしい頭のこぶを押さえていた。

ぶつかったのに僕が動かなかった、ってことは……青年もといリユートは、柱か何かに自分から突撃したに等しい。しかも、頭から。

彼の後ろにいるアニーが怒っている理由はそこにあたりする。僕のせいでリユートが怪我をした、と。

いや、まあ確かに悪かったけども……それにしたって、彼女から感じる敵意が尋常じやない。

で、残る一人……黒髪はさばさの男は――。

「確かなな。ま、その男が気に入らないってのはアニーと同感だが……リユートを助けてくれたのは事実だ。あんまりギャーギャー言うな」

「けどギドー」

名前は、ギド。

やはりというか、リユートの仲間で……あ、僕のことを気に入らないのは一緒なのね。何でこんなに敵視されてんのかな、僕？

今この場にいるのは、僕とエルク、合流したザリーとシェリーさん。それにリユート、アニー、ギドの三人だ。

まあ、顔見知りではないので、話すことがあるわけでもない。偶然ちよつとしたトラブルに巻き込まれただけだし。

なのでさっきの、リユートが僕に「ありがとう」って言ったことで解散……と、思ったんだけど、何だか妙な展開になろうとしていた。

「……ちよつと、聞いていいかな？　ミナト、だっけ？」

「ん？」

初対面でいきなり呼び捨てにされたけど（そもそも名乗った覚えは……ああ、エルクが呼んでるのを聞いてたのか）、まあ別に気にしない。そういう人もいるだろうし。

リユートは少し言いつらそうな、しかし言わなければならぬと決意しているような、なんとも難しい表情で口を開いた。

「さっきの手さばきや、ぶつかった時の頑丈さから見て思ったんだけど、ミナトって実は

「すごく強いんじゃない?」

「……え、いきなり何、その質問。意図は?」

「いや、そんな自慢するほどじゃないけど……まあ、冒険者をやってるわけだから、それなりに腕に自信はあるけどさ」

「とりあえず当たり前障りのないよう答える僕。」

「やっぱり……」

「で、それがどうかしたの?」

するとリュートは、一拍置いてからこう言った。

「教えてほしい。どうしてミナトは、あの子を助けなかったんだ?」

「……はい?」

えーと、『あの子』っていうと、商人に蹴られてたあの少年?

「そうだよ。君の実力なら、簡単に助けられてたはずだよな? ひょっとしたら……僕なんかよりも要領よく、早く。どうしてそうしなかったんだ?」

そう問いかけてくるリュートの目は、どこまでも真っ直ぐ……真っ直ぐすぎるほどに真っ直ぐ。そんな目で、僕を見つめていた。

「えーっと、その……下手に手を出すと、面倒に巻き込まれそうだったから、かな?」

そう言うのと、なぜかリュートははっとして、シヨックを受けたような表情になる。

アニーとギドは『やっぱりか』とでも言いたげに……これまたなぜか、さげすむように見てくる。

え、何? 何で?

やがてフリーズから回復したリュートは、むっとした顔付きとなった。

「どうして助けないんだ!? そうするだけの力があるのに……何で!」

「え、ちょ、いきなり何!」

「何?」じゃないよ! 目の前で苦しんでる子供がいるのに、そしてその子を助けるだけの力があるのに、どうして何もしようとしないんだ! そんなのおかしいだろう!」

ずいっとこつちに顔を寄せて、というか体ごと僕に迫って、結構な大声でそう主張するリュートの目には……義憤? みたいなものが強く見て取れた。

そのままリュートはこう語った。

盗みを働いた少年も、確かに悪いんだろう。リュートの介入後も、しつこく商品を奪おうとしていたし。それでも、まだ未成熟で体が頑丈じゃない小さな子供を、大の大人がある風に何度も暴行していいはずがない。

盗みを働いたことを責めるなら、もっと他にやりようがあるじゃないか、と。

取り押さえるのに力ずくになるのはしかたないとしても、いきなりあんな暴力的な制裁をしていいはずがない、ということらしい。

なるほど、言いたいことはわかる。

甘い、と言わざるを得ない部分も多々あれど、大人の腕力で暴力を振るわれれば、深刻な怪我をしてしまうかもしれないわけだし。

……でも何でその抗議が、暴行を加えた商人本人だけでなく、僕にまで来るの？

僕がそう言うのと、それに答えたのは、すっかり実直&熱弁キャラという印象が僕の中で固まったリユートではなく、その一步後ろでやや高圧的な態度を取っているアニー。

「はあ!? そんなの決まってるじゃない! 目の前で子供がいじめられてたら、助けるのが当然でしょうが! あんた達は何で何もしないのよ!」

いきなり、がーっと嘔み付くようにまくし立てた彼女の勢いに、思わず気圧けおされてしまう。こ、こっちも、リユートに負けないくらい予測不能な……。

「いじめる奴も悪いけど、それを見て見ぬ振りする奴も悪い、って聞いたことあるでしょ! 苦しんでる子供を見て何もしないなんて、常識を疑うわね!」

「全くだ。頭の中どうなってるんだって話だよな」

アニーの横に仁王立ちしている、ギドまでも加わってそんなことを。

な、なんだろうコレ? 何だか、妙な展開になってきた……ような……?

どうもこの三人……僕が、あの子がいじめられている現場を見ても何もしなかったことがお気に召めさならしい。とくに、アニーとギドはあからさまに敵意丸出し。

いや、僕だってあの光景は見てて気持ちいいもんじゃなかったし、どうにかしたいとは思ってたよ? 別に、どうなってもいいや、とは思ってなかった。

だから、まあ、警備兵呼んで仲裁してもらおうかな、と思ったところに、彼ら三人が乱入してきたわけで。

決して、そのまま暴行が続くのをやしとしてたわけじゃないんだけども……。

彼らは、僕らの戸惑とまどいの表情なんかも無視。

すると、罵声すらも混じったその一方的な説教に、さすがに腹が立ったのか……口達者なエルクが一步前に出た。

「でも、それで私達まで面倒事に巻き込まれちゃったら災難じゃない。あんたらの言うこととはもつともだけど、それを考えれば、慎重になつてしかるべきでしょ?」

僕らの中で、とくに気が短いのが彼女だつたりするから、さすがに頭にきたんだろうか。対するは、アニー。はっ、と吐き捨てるように言つて、エルクを蔑視する。

「何あんた? 自分達だけよければいいわけ? 罪のないいたいな子供が酷い目に遭あつてようと、自分が痛くなければ別になんでもないってわけね、ホント最低!」

「そこまでは言っていないでしょ? ただ、私達にまで面倒が及ぶかもしれないの考えもせず介入しろつていう言い分も、無茶があるって言いたいだけよ」

「どこが無茶なのよ? あんな芸当ができる力量があるくせに。それに、正しい行いには

少なからず向かい風が伴うものだっていうのは常識でしょ？ リュートはいつも言ってるわ。そして……それでも構わず、弱者を助けてる」

「そうだ。力がなくて手が出せねえってんならともかく、お前らは力があるのにやろうとしねえ……ただの卑怯な臆病者だ。リュートを見習いやがれ、コイツは一度だって逃げたことはねえ」

ギドも加わって、引き合いに出したリュートを褒めて、僕らを罵倒。

当のリュートはと言うと、少し複雑そうな表情をしているものの、『恥じることはない』とても言うように、こつちを真っ直ぐ見すえている。

「……ご立派ね」

「ええ、あんた達なんかじゃ到底及ばないのよ、リュートにはね。うらやましい？」

「別に。私達には私達の考え方があるもの。あなた達のリーダーさんのやり方や価値観を否定するつもりはないけど、こつちもこつちのやり方を変えるつもりはないわ」

「つ……これだけ言ってまだわからないの!? いつまでそんな自己中心的な考え方で、助けを求める誰かに背を向け続けようっていうのよ!」

「だからって、行く先々で面倒を全部引き受けて慈善活動なんてできるわけじゃないでしょ? 聞くけどあんたら、明らかに不利益を被るのが確実な奉仕活動に、参加しろって他人に押しつけられるの?」

「当たり前でしょ!? 人と人が助け合うのは当然のことだもの。勇気を持って隣の人に、何が大切かをきちんと説けば、より多くの人が救われるんだから!」

「……あ、そ、じゃあ、その人達がそういうことに巻き込まれなくて、その『大切』な奉仕活動に参加すると必要な自分の財産が損なわれるから、参加しない、っていう立場を明確にしても?」

「同じことを何度言わせるのよ!? 説得するに決まってるでしょ! 時間もお金も、リュートのように正しい目的に使わなきゃ、自分の品位を損ねるだけなの。人と人の助け合いや慈善の精神以上に大切なことなんてないって、どうしてわからないの?」

さも当然のように、『人は自分が損をしてでも、困っている人を助けるべきだ』と、熱く語るアニー。もはや、こつちの言い分を聞く気ゼロである。

「目の前に困ってる人がいて、自分には腕力なり財力なり、その人を助けるだけの力がある。だったら、助けてあげるのが当然でしょう? 多少自分が損をしたって、それで誰かが助かるなら、普通に考えてそれが道德的、良心的な人間のあるべき姿よ! 逆にそれができない、いちいち見返りを求めるような人は、絶対に間違ってるわ!」

熱弁。

はあ、とそこでエルクがため息をついたのを見て、どうやら論破したと思ったのか、にやりとその顔に笑みが浮かぶ。

……エルクのため息が、論破された悔しさではなく、諦めや呆れであると、彼女は微塵も考えられないだろう。

その後も、自分達の価値観や良心に沿った見方で、彼らはガミガミ言い続けたけども、そこで僕やエルクが首を縦に振ったりすることは無い。

結局、コレじゃ埒が明かないと判断したザリーが落としたところを見つけて、『はい今日はこれまで、解散！』と場を収めてくれるまで口げんかは続いた。

……いやそもそも、なんで、こんなことになったんだっけ……？

☆☆☆

別れてから数分後。

ザリーから聞かされたのは、あのリユート達がどういう連中なのかという情報だった。

『「ブルージャスティス」？ 何、その……かっこいい名前を付けようとして失敗したみたいなのやっ！』

「うん、まあ、成功か失敗かは個人のセンスによると思うけど……それがあのリユート君達が所属している、っていうか、三人で組んでるチームの名前なんだよ。さっき思い出した」「やっぱりあの三人、チームだったのね」

得心がいったように言うシェリーさん。僕とエルクも大体同じ感想だ。

あの様子だと、リーダーはリユートだろう。後の二人は、まずリユートありきみたいな感じで話してたし。

で、ザリーが続けることには……今、いろんな意味で急激に有名になってきているチームらしい。

ザリーは懐から取り出した手帳をつらつら読み上げる。どこから仕入れたのか知らないが、リユート達の情報もあるのか。

「まあ予想はついてると思うけど、リーダーはランクBのリユート・ファンゴール君。それと、仲間……さっきいた二人ね。ランクCのアニー・レビスちゃんに、ランクBのギド・タジャック君。合計三人のチームで、結構な実力者なんだけど……」

……けど？

「さっき見たとおり、リーダーのリユート君を中心に、メンバー全員、正義感みたいなのが過剰にあつてね。弱者救済を目的にいろんな人、いろんなところにしよっちゅうケンカを売るらしいんだ。だから、その筋じゃ評判最悪」

「ケンカ……確かに、だれかれ構わず売ってそうね」

「最近じゃ、護衛してる商隊が貧しい村に差し掛かったとき、炊き出しのために食料や資材を提供しろって言い出したり、またある時は奴隷商人に……ああもちろん、合法的なやつ

ね？　かわいそうだから解放しろとか食って掛かったつてさ。だから今じゃ、商人の間では、過激なモラル遵守主義者として、ブラックリスト入りつてわけ」

「……姉さんも知ってるかな？」

「知ってると思うよ？　マルラス商会が提携してる商会の中に、奴隷商もいたはずだし……マルラス商会もトラブルがあつたかもね。基本彼ら、誰に対しても考え方を押しつけるから」

聞いているだけだとただのお人好しだけど、肌で体感するとあの面倒さっていうか、強引さがよくわかる。だから、あんまり笑えない。

確かに、それぞれの価値観や営利追求を第一の目的に置いている『商人』からしたら……人の道＝ボランティアみたいな考え方のリユート達は、うつつうしいことこの上ないだろう。

まさに水と油のように相性は最悪だ。

そして厄介なのは、どっちも間違つてるとは言えないところだよなあ……商人が利潤を追求するのは当然だから、そこに文句なんか言えない。

それにリユート達の行いも、不幸な人に手を差し伸べてるんだから、確実に救済されてる人はいるわけだ。それを考えれば、迷惑なだけでもない。

何にしても……これ以上彼らとは関わらないほうがいい、な。お互いのために。

……なんてことを言ったらフラグだろうか？

第二話 意外な展開

『合同訓練合宿』当日。

ギルドで指定された場所に僕ら……いつもの四人と一羽が着くと、そこにはすでに、数十人の冒険者がいた。

ごついのもいればヒョロいのもいる。

武器も様々、剣とか杖とか。斧や槍なんて人も。

若い人がやっぱ多いけども、更なる高みを目指したい老若男女……ランクにして、D～F程度の冒険者達がたくさん。

Cランクも一部ながらいるみたいだけど。

「……ま、さすがにAやBはいないみたいね」

「ははは、そりやそうでしょ。シェリーさんやミナト君は、むしろ指導する側でしょ」
「あんたも人のこと言えないけどね」

思い思いの言葉を口にする、シェリーさん、ザリー、それにエルク。

ちなみにエルクもCランクであり、この場においては上から数えたほうが早い戦闘力を誇っている。そこそこよろしく。

そんな中で僕は、あちこちから飛んでくる視線に、ややうんざりしてため息をついた。なんというか……何度味わつても、完全には慣れるもんじゃないな、こういうのは。

根が小心者だからか、こういう露骨に感情の籠もった視線は嫌いだ。

このウォルカでは、Aランクである僕やシェリーさんは、やや自画自賛ながら結構な有名人名なので……注目度が高くなってしまう。

多分この中の何人かは、Aランクの僕らがこの場に来てることを、冷やかしか何かのようには思ってるんだろう。

……やっぱり疎外感はあるなあ。

そもそも僕ら四人は、誰一人『訓練合宿』の最適ランクだつていうD〜Fに属してないから、明らかにアウエーな気がする。

しかし、それがわかつていながらも……僕は、姉さんの『きつと得るものがあるから』という勧めもあつて、真面目に参加するつもりでいる。

また他の三人も、それぞれの思惑を持って参加しているようだ。

エルクは、今までの訓練の成果を試す意味で。

ザリーは、最近いろいろと話題になっている、もしくはなりそうな冒険者を手っ取り早

く間近で観察できるかも、つていう、いかにもこいつらしい目的。

シェリーさんは、出会いを求めて……物騒な意味での出会い、だけど。

ただ、僕とエルクの予想&ザリーの情報だと、そんな彼女の戦闘意欲を満足させてくれそうな生贄……もとい人材はここにはいないだろうとのこと。

そしてその分の欲求不満が、僕に来る可能性があるらしい。おいおい……。

僕の肩のアルバは、魔法の見学&学習のためだ。

初心者用ならほとんどの魔法は習得したアルバだけでも、その総仕上げとしての参加だ。そんな感じで、それぞれの思惑を胸に、僕らは冒険者ギルド主催の『合同訓練合宿』に参加した。

☆☆☆

まず一日目。

集合時間をもって受付が締め切られた後、さっそく最初の訓練メニューが言い渡された。といってもそれは、訓練というよりも体力測定に近い。

筋力、持久力、敏捷性、魔力の検査が、午前中いっぱい使って行われた。

測り方も意外と普通で、ただの百メートル走とか、ひたすら走る持久走とか、バーベル

みたいなのを持ち上げるベンチプレスもどきとか、指定された地点を素早く跳び回る反復横跳びっぽいやつとか、いろいろ。

あとは、マジックアイテムみたいなのを使って計測する魔力測定なんかもあったな。終了後すぐに、手書きの測定結果が全員に配布された。

一応それらの結果を目安にして、各自のトレーニングの目標とか、模擬戦の相手を決めらしい。

『筋力』『持久力』『敏捷性』『魔力』の四項目共通の評価点は、冒険者ランクと大体同じ感じで、FからSS。

ま、基本初心者のためのものだから、いつもはそんな上の評価なんてなかなか出ないみたいだけ。

……今までは、だけ。

例えば、エルク。

筋力…D 持久力…C 敏捷性…B 魔力…C

常人が限界まで努力した場合の限界値がCであることを考えると、かなり高めな能力。エルク自身、まだまだ発展途上なわけだし。

とくに敏捷性のBは、明らかに才能がある証拠だからなあ。

ザリーに聞いたところ、この評価なら『訓練合宿』への参加が有意義か否かのギリギリのラインらしい。

そのザリーはというと……。

筋力…C 持久力…B 敏捷性…A 魔力…B

全体的にエルクの一回り上、って感じのステータス。

そして結論をはっきり言えば、この訓練に参加する必要はもはやない。

ザリーは冒険者としてのキャリアが長く、さらに課報専門ちゅうほうとして特殊な能力もあるし、さほど不思議じゃないけど。

それにしても、敏捷性Aはすごい。

ただ、上には上がいる。

汗もほとんどかくことなく、全ての項目を検査し終えたシェリーさん。顔を引きつらせた係の人に書いてもらった評価を見せてもらう。

筋力…A 持久力…A A 敏捷性…A 魔力…A A

立ち読みサンプル はここまで

さすが冒険者ランクA。それも、B寄りではなくAに近い「ランクA」というだけはある。魔力の高さは種族としての特性だ。ネガエルフだと知られて騒ぎになるとまずいから、一応測定の際には手加減したらしい。これでも、もちろんこの訓練に参加する必要など皆無。
え、僕？ 僕は、そのー……。

筋力… 持久力… 敏捷性… 魔力…

備考… 君は測るだけムダだからじっとしてなさい。アイリオン・ジェミーナより。

ギルドマスターこと、アイリオンさん直筆らしい、そんな紙を渡されて……参加すらさせてもらえなかった。ちよつとさびしかった。

☆☆☆

それから二泊三日で、ちよつときつめの部活みたいに『訓練合宿』は進んだんだけど……予想通りというかなんというか、僕ら四人にとって、その間はなんとも退屈な日々だった。

エルクは、まだ荒削りな部分があつた戦闘技術の向上を目指してたみたいだけど……實力はCだから、模擬戦になればほぼ百戦錬磨。

勝てなかったのは、ザリーやシェリーさん、僕相手の時くらいだ。

ザリーとシェリーさんは、ほとんど負荷もなく訓練をこなし、模擬戦もほぼ全てで完封勝利。

ザリーはそんな中でもそれなりに楽しんでたみたいだけど、シェリーさんはもう、心底機嫌が悪そうだった。

いや、最初から予想できたことでしょうに。

そして僕もまた、何かしらアドバイスをもらえるかと思つて、監督の先輩冒険者（Cランク）に話を聞いてみると、「そもそも動きが見えないです」と泣かれそうになった。

そんな感じだったので、エルクと見学に徹してるアルバ以外には、残念ながらこの訓練はちよつと退屈だったかな……と、思っていた。僕含め、全員が。

その予想が、訓練最終日に下ぎつくひっくり返されるということを、僕らはまだ知る由もなかった。

☆☆☆